

間一髪、復員船に

長野県 梅垣恭治

東京被服廠に勤務していた私に、二回目の召集令状が来て、金沢の東部五五部隊に入隊したのは昭和十六年七月二十日のことだった。金沢で約一カ月間の教育を受け渡満、牡丹江第四五三部隊（輜重隊）に配属となる。

敗戦の色も濃くなった昭和二十年四月、綏南において新設満州第一三〇五二〇部隊が編成され、この部隊の所屬となる。しばらくして私は獣医教育を受けるため、新京にあった関東軍獣医学校に入校し教育中、八月九日ソ連軍参戦と同時に通化に向かって南下途中終戦となり、八月二十五日開源において武装解除となる。その後九月一日、吉林に收容され帰国の日を待つ。

やがて九月十八日に命令が下り臨時作業隊が編成され、黒河を通りソ連領に入り、ブラゴエシチュensk

を経てチタに到着、チタ第二四收容所第八分所に收容される。この收容所は仮の施設で、電気もなくまことに不自由な上、食糧も粗末な上に量は少なく、その上零下五〇度の中の重労働、宿舎に帰ればシラミ、南京虫に悩まされ、全くこの世の生き地獄であった。

しばらくして第一八分所、第七分所と転々として第一六分所に落ち着く。この收容所は電気もあり、少しはましだった。また、作業も特技を生かした作業ができるようになる。私は被服廠での技術を生かし、被服工場で働くことになる。この工場は一般ロシア人と一緒に縫製の仕事で、その技術を買われ大変重宝がられる。

やがて民主化運動が盛んになり、その一環として文化運動があり、演芸会なども催すようになり、その衣裳をつくる担当の文化委員として参加することとなる。東京ダモイの話は何回もあったが実現しなかった。

だが、昭和二十三年八月、いよいよダモイの時が来た。八月二十五日ナホトカに復員船が入る。この船に乗るべく点呼が始まる。何回行なっても二人多いというこ

とで、二人残される仲間に入れられ、どうなることかと心配しながら皆を見送り宿舎に帰ろうとしたときのこと、後ろの方で突然大きな声で、「二人足りない、大至急来てくれ」の声に、我に返り乗船することができ、待ちに待った帰国となる。

いよいよ舞鶴に上陸すると、アメリカ兵が待ち受けていて調査が始まる。いつ、どうしておったのか、ソ連での文化活動についてのことがアメリカ軍の手に入っていて、その調査。三日間の調査の結果、家に帰ることができる。

家に帰り、小さいながら縫製工場を始めて間もない昭和二十四年一月二十一日になって、突然米軍より取り調べのため長野の県庁に出頭するよう命令が来る。県庁に行ってみると、やはりソ連における民主化運動についてであった。日本へ帰るための偽装運動であることの説明をしてもなかなか納得してもらえず、三日間の取り調べの末ようやく納得してもらい家に帰ることができ、長い抑留生活の結末もすべて終わった。

シベリア抑留記

静岡県 松浦和 市

私は、静岡県小笠郡西山口村成滝において、大正十年二月十五日出生、昭和十年西山口尋常高等小学校卒業、その後父母とともに農業に従事する。徴兵にて昭和十七年一月十日福井県鯖江中部六十四部隊へ入隊、一月二十八日中国山東省青洲県益都着、北支派遣秋四二八六部隊に編入。その後、陣部隊と改称。

昭和二十年五月満州興安南省通遼に部隊移動。しばらく熱河省方面を行動中状況悪化により帰途、錦県で陣地構築準備中、終戦の詔勅をラジオで知りました。

混乱の中で、ついに奉天皇姑屯貨物廠において武装解除。その後百名くらいにて付近の部落に宿営。このころより一段と居留民の財産・物資の掠奪、婦女暴行等、満人の暴徒・ソ連兵が横行、日夜無警状態と化した。丸腰の我々集団ではどうすることもできません。